

早秋サンフランシスコの旅



暦の上では早秋であるがアラバマはまだまだ真夏の激しさが残っている。

うだるような猛暑である。地球温暖化、こまったものだ。

そんな深南部からサンフランシスコに黒帯審査と講習会の為に9月21日早朝旅立った。フライトも不思議と全て順調であった。

何時も必ずと言っていいほど、予定の便が遅れたり、メカニクの故障とか、いろいろと問題が起きるのだが今回は乗り継ぎもスムーズに予定通りである。

毎年サンフランシスコの旅は楽しみにしている。

斉藤師範やその家族、サンホゼの福西先生との再会など楽しみである。

斉藤と福西の道場生、黒帯やその他の門下生の態度礼節が良く、一緒に汗を流し、稽古をすると気合が自然と入る。

指導している時も、稽古の後の会話でも変に構えずに打ち解けた話ができる。

カラテに対する姿勢が真っすぐである。気持ちがいい。

今回の講習会のテーマは受け技である。

受け技と言ってもその範囲は広いのだが、基本的な受け技を普段の稽古では表面的にしかこなしていないようである。言い換えれば惰性で稽古をしている感じである。

そこでその点を反省して、普段気かけずに見過ごしているポイントを見直し深く練り上げよということである。

受け技は突きや蹴りを、止める、弾く、流す、かける、かけ回す、押し込む・・・などいろいろあるが、“受

け“即反撃の技は何かで受け方が違ってくる。

相手の攻撃を受けた後、突くのか蹴るのか、投げるのか、また逆技を決めるのか、その人の受の型によって受け方が異なってくる。単純ではなく深いのである。

華麗と言うか、華のあるカラテの演武は約束組手である。

中でも受けの約束組手は派手と言うか大袈裟に見せられる。

相手の真剣み溢れる顔つき、見せかけだけの気合からの突きや蹴りを受けて倒す。

とくに相手の技を受けて崩し、ドラマテックに投げる技が入る約束組手は絵になる。

見ている人はその素晴らしく且つダイナミックな動きに感銘を受ける。

ある種のマジックである。残念ながら誤解である。

私は演武をするにはやはりいくらか派手に見せないといけないと思うが、困るのはそれをそのまま信じてしまうカラテ家や門下生が多いことである。素人は別である。

武蔵の五輪書の中、地の巻“一兵法の道と云事“の章で・・・世の中をみるに、諸芸をうり物にして、・・・

花実の二つにして、花よりみのすくなき所なり、とりわき此の兵法の道に、色をかざり、花をさかせて・・・

利を得んとおもふ事・・・なまへいほう大疵のもと、・・・戒めている。

さすが宮本武蔵である。

だから彼の残した五輪書は今も世界中で読まれているのだろう。

思うに IT 革命、AI 時代という現在も人間の本質は余り変わっていないかも。

私はいつも言うように若い時は、前に、前に出る組手を修行することが大切だと思う。

若々しさは自然と何事においても、行動力が旺盛に沸き立つ。命が輝いている。

若い身体、腕にも脚にも胸にも気が溢れるように生まれる。

その身体、こころの中にある気を練って鍛える、強靱にする、それがカラテ道である。

他の武道も、スポーツも同じであると私は思っている。

前に出る組手の先に受ける組手が自然と生まれる。

私は、前に出る組手、受ける組手、変わる組手が別々にある事ではなくカラテの修行の道程を言っているのである。

実戦での相手との攻防は、時として先に攻め相手の技を誘う、また受けて崩しそこから反撃をする、足の運び動きに変化を入れて相手を惑わす・・・無限に変化する訳である。

・・・若い時は、力や速さを練って、練って気合を強くする。

技はその後に自然についてくる。

自分のカラテを鍛えぬくためには痛い思いもせず強くなろうとは思はないことである。

なにか受けの話から脱線しているように読めるかも知れないが、私がここで言いたいことはカラテ道の稽古

の中に嘘があってはいけないということである。

まさに武蔵が五輪書の中に言っていることを、自分に言い聞かしているのである。

稽古に徹していると技が語りかけてくる時がある。

ふっとした瞬間、稽古している技がその特徴にあった足の運び、上体の使い方、呼吸の取り方、力の緩急・・・など疑問を持たずに稽古していたその基本技が違った色を見せてくれる瞬間がある。

それがその技が語りかけてくるということである。

隠れていたその技の特徴というか、ヒントが語りかけてくような瞬間がる。

私はそんな経験を何度かしてきた。その度にまだまだ修行が足りないと感じられた。

ホント空手の世界は稽古をすればするほど深いように感じる。

受けの基本技を稽古していて昨年の暮れに、受け技が語りかけてきたように感じた。

あくまでも、ただ感じたのである。

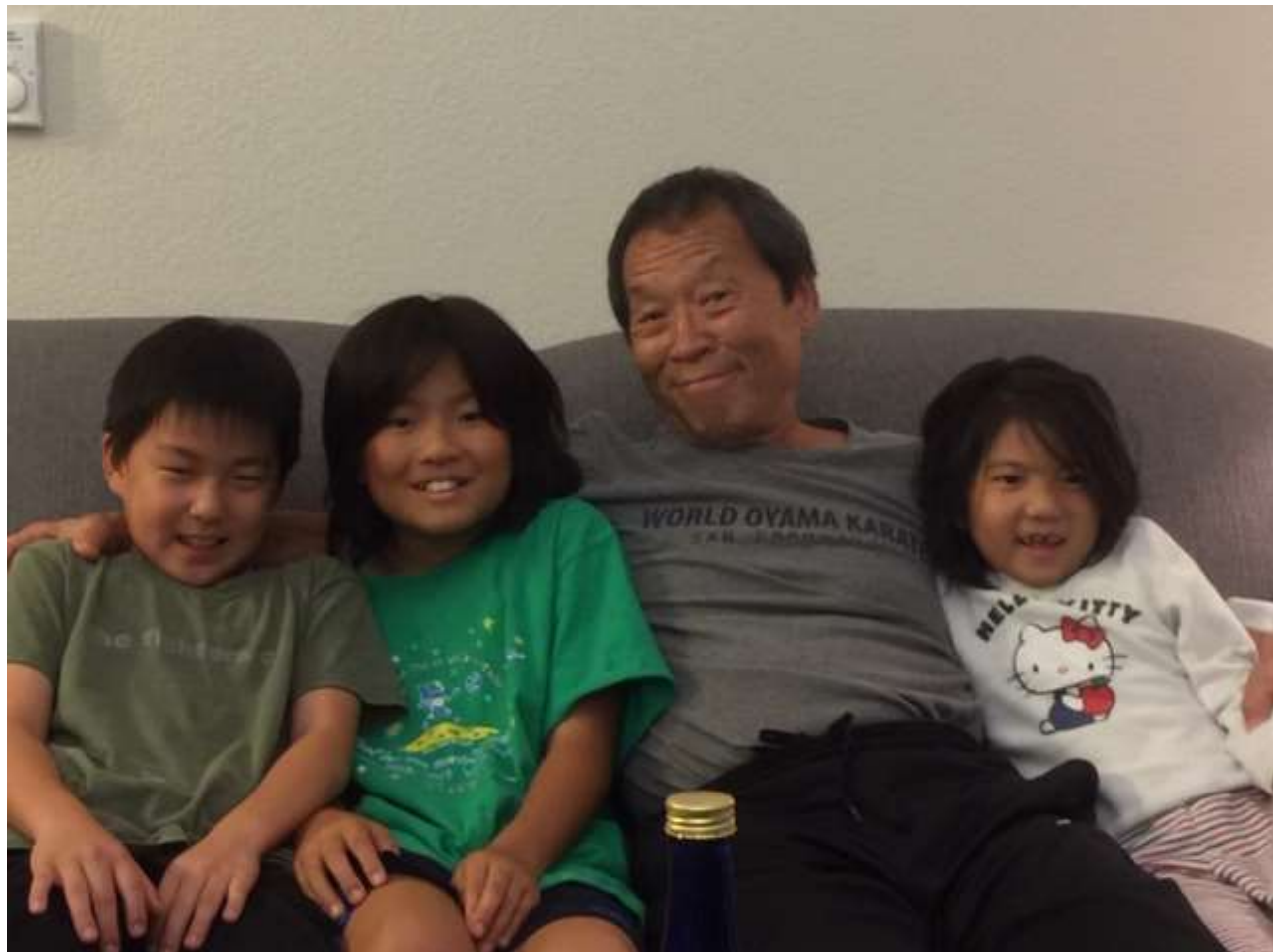
そこから新鮮な気持ちでまた受け技の稽古に入れた。

まだまだ納得したわけではないがその経験、稽古で幾らか身についた動き、技をワールド大山カラテの師範、先生その他門下生に分かち合いたいと思った。

今回の講習会は私が一人稽古中に、受け技が語りかけてきた経験を皆と分かち合い、一緒に稽古して汗を流せば素晴らしかったことである。

講習会が終わって私の指導が伝わったかどうかは分からないが、ヒントになった事は間違いないと感じた。後は一人一人が練って会得していくことである。





慶介、翔太、美佳

SF の旅のもう一つの楽しみは審査、講習会が終わった後の斎藤家での食事会である。

アラバマではなかなか手に入らない海の幸、トップのシェフ先輩岩本が料理する豪華な料理、サンホゼの先輩白石から届いた絶品の日本酒、今思い出しても口の中に唾が湧く。

審査、講習会の緊張をゆるやかに溶きほぐしてくれる冷酒、ゆっくりと味わいながら飲み、刺身やおでんに箸を運ぶ。

ワールド大山カラテ万歳である。

健康第一 オス